

## 14 世紀後半における厳修化と反一托鉢修道会

鈴木 喜晴（早稲田大学非常勤講師）

「長い宗教改革」という用語は、主に 1. 近世イングランド史において、16-17 世紀の宗教改革の諸相を指す場合と、これとは別に、2. 14-16 世紀にかけての宗教改革に先行する多様な宗教運動を指す場合という、二通りの用法が存在する。とはいえ、どちらの用法においても宗教改革は一種、長期的な持続として認識されている。ここで問題となるのは、現実の運動の展開だけではなく、宗教改革の系譜論と呼ぶべき言説の存在である。本発表はこの点について考察し、1.と2.の間に、ある種の言説の引用、ないしは転用関係が存在することを論じた。

イングランドの初期宗教改革研究は、中世後期のロラード運動や反聖職者主義が宗教改革に及ぼした影響を重視する古典派と、これを批判する修正派とに二分されてきた。修正派は古典派の議論を、伝統的な宗教改革観の無批判な引用だとする。だがそもそも伝統的な宗教改革観はいかにして形成されたのであろうか。一つの鍵は、ジョン・フォックスによる『殉教者伝』である。『殉教者伝』は 1563 年に印刷本のかたちで刊行されて以来、多くの読者を獲得し、中世後期のウィクリフ、あるいはロラード派による教会批判についての知識を後世に伝え、また彼らの活動を「宗教改革の明けの明星（先駆）」とみなすプロテスタントの見解を形成した。

フォックスは中世後期の異端運動について、知識をどのようにして得たのだろうか。近年の研究は、フォックスと親交のあったジョン・ベイルの影響をしばしば指摘している。元カルメル会士で写本収集家だったベイルは、『毒麦の束』の名で呼ばれるウィクリフの著述について知っており、フォックスの『殉教者伝』著述に大きな影響を与えた。けれども、ベイルがアクセスした『毒麦の束』とは本来、15 世紀前半にカルメル会で作成された写本の一部に過ぎない。この写本は現在、ボドリアン図書館の Ms. e Mus 86 として現存しているが、内容はウィクリフとロラード派の言説に限らず、14 世紀前半から 15 世紀初頭に至るまでの使徒的清貧と托鉢修道会についての論争が多くを占めている。

カルメル会はなぜこの文書群を長期間にわたって集積したのだろうか。14 世紀前半においてカルメル会の作家たちは、主に教皇側の論客としていわゆる「清貧論争」に積極的に関与しており、また一部は、当時のフランシスコ会系異端について強い関心を抱いていた。だが、イングランドのカルメル会士たちは、単に教皇庁の論争や異端取り締まりという観点から、文書を保存したわけではない。14 世紀半ばから後半において、アーマー大司教リチャード・フィッツラルフ、また彼に強い影響を受けたウィクリフ、さらにはウィクリフに共鳴したロラード派の人々は共通して、托鉢修道会に対する強力な批判者でもあり、しかもカルメル会についてなんらかの知識を有する人々だった。

総括すると以下ようになる。14 世紀において、教皇庁と教会についての論争が増加し、またカルメル会と会の批判者たちとの間で、清貧と托鉢修道会についての論争が繰り返された。この結果、諸論争の集成として上記の写本が 15 世紀前半に作成された。16 世紀半ばにベイルがこの写本にアクセスしたことによって、彼は会の批判者たち、とりわけウィクリフの言説に

ついで知見を得た。ベイルがプロテスタント陣営に転じたことで、この知見はカルメル会と批判者たちとの論争という本来の文脈を離れ、「宗教改革の先駆者たち」についての歴史叙述として「再発見」されることになったのである。